

## 日本気象学会第27期役員選挙候補者名簿

(記載順は地区毎に受付順)

1992年4月17日

日本気象学会選挙管理委員会

## 1. 理事 (地区別)

氏名	所属	推薦者
「北海道地区」(定数2名:候補者2名)		
菊地勝弘	北海道大学	A
久保田効	札幌管区気象台	A
「東北地区」(定数2名:候補者2名)		
田中正之	東北大学	B
白木正規	仙台管区気象台	C
「関東地区」(定数13名:候補者14名)		
小倉義光	日本気象協会	D
関口理郎	日本気象協会	E
竹内清秀	日本気象協会	E
大西晴夫	気象庁予報部	E
木田秀次	気象研究所	E
岩崎俊樹	気象庁予報部	E
中村一	気象大学校	E
浅井富雄	東京大学	E
村上勝人	気象研究所	E
藤谷徳之助	気象研究所	E
新田勅	東京大学	E
松野太郎	東京大学	E
中井公太	気象庁観測部	E
高野清治	気象庁予報部	E
「中部地区」(定数2名:候補者2名)		
里見穂	名古屋地方気象台	F
武田喬男	名古屋大学	G
「関西地区」(定数4名:候補者4名)		
光田寧	京都大学	H
廣田勇	京都大学	I
高谷悟	大阪管区気象台	J

佐橋謙	岡山大学	K
「九州地区」(定数3名:候補者3名)		
高橋劭	九州大学	L
小林哲夫	九州大学	L
山中陸夫	福岡管区気象台	M
「沖縄地区」(定数1名:候補者1名)		
石島英	琉球大学	N
2. 監事(定数2名:候補者2名)		
佐藤信夫	気象庁予報部	E
多田一正	気象庁総務部	E

## 推薦者

A: 澤田可洋, 山崎道夫, 遠藤辰雄, 松田一

B: 近藤純正

C: 山岸米二郎, 青木孝

D: 朝倉正, 浅田暢彦, 駒林誠, 関口理郎

E: 門脇俊一郎, 小長俊二, 竹内清秀, 二宮洸三, 原田朗, 松野太郎(候補者本人を除く)

F: 土屋喬, 室谷時夫, 田沢秀隆, 佐々木保男, 原野谷周久, 谷口美昌

G: 田中浩, 大畑哲夫, 石坂隆, 藤吉康志, 加藤内蔵進, 瀬古勝基, 岩坂泰信

H: 村松久史, 田中正昭, 余田成男, 岩嶋樹也, 廣田勇

I: 村松久史, 西憲敬, 田中正昭, 余田成男, 岩嶋樹也

J: 村松久史, 足立崇, 山田隆之, 正木明

K: 村松久史, 田中正昭, 塚本修

L: 山中陸男

M: 高橋劭

N: 小野俊行

## 候補者名, 略歴, 所信

## 1. 理事

「北海道地区」(定数2名)

氏名	生年月日	卒業年次
菊地勝弘	昭9年7月14日	昭34年北大院卒

1992年5月

従来通り, 気象学・大気物理学の発展のため, また自然災害の軽減・防除のための研究や国際協力を通して微力を尽くしたいと考えています。そのため, 基礎研究は勿論, 共同研究にも力を入れ, 海外

49

学術調査や国際共同研究、そして留学生の受け入れ等を通して貢献するつもりです。

久保田 効 昭11年8月11日，昭34年九大卒

気象技術の進歩は大気科学の発展と不可分のものであり、この点からも日本気象学会の発展を望んでいます。気象台が推進しているメソ量的予報から地球環境問題に至るまでの気象技術は大気科学に立脚したものであるべきだと考えるからです。

なお、日本気象学会では、大気科学の基礎部門のみならず気象技術に関する部分でも学会活動を活発にすべきだと考えます。

「東北地区」（定数2名）

田中正之 昭10年4月15日，昭36年東北大院卒

日本気象学会は、気象学そのものの発展はもとより、わが国気象学の研究・教育体制の整備充実についても絶えず努力してきました。その努力は東京大学「気候システム研究センター」の設立等々の形で次第に捻りつつありますが、まだ決して充分なものではありません。この点に関していっそう議論を深め、さらなる努力を尽くすことは、私達の世代の重い責任であると考えております。

白木正規 昭19年12月26日，昭44年京大院卒

気象庁の予報・観測業務は、気象学の発展を支える役割と、気象学の成果を社会に還元する役割の両面を持っている。気象庁に勤務するものからみると、気象学会の活動に、気象庁の業務面と大学等の研究面との連携を、さらに強める必要性を感じる。気象庁の地方職場の、調査研究・技術開発などの業務をとおして、この連携強化に多少でもお役に立ちたいと思っている。

「関東地区」（定数13名）

小倉義光大11年5月11日，昭19年東大卒

趣味を同じくする者が集まって同好会を作り、同人誌を発行するという形態から、日本気象学会は次の2年間で一層脱皮し、より大きな社会責任を負うでしょう。最近学会としては初めて政府官庁などから研究委託業務を受けましたが、それ以外に新しい役割を一つだけあげるとすれば、今年3月の気象審議会の答申にある民間会社による不特定多数への天気予報の問題があります。類似の問題でアメリカ気象学会や英国王立気象学会が果たした役割を考えれば、日本気象学会も当然こうした問題を中心となって考えざるを得ません。こうした社会的役割に対応

するためには、学会の事務局の強化や管理運営体制の近代化が必要ですが、同時にその根本を支える会員一人一人に、あなたにとって日本気象学会とは何ですかと問いかけた時、どんな答が返ってくるか、常に心にためておきたいと思います。

関口理郎 大15年6月25日，昭28年東大卒

この度、これまで学会から多くの便利と恩恵を受けてきたことを踏まえて、学会の運営に直接参加してその活動の一層の活性化に幾分かの寄与をする決意で立候補しました。

学会は環境科学関係の団体の中で重要な役割を果たす立場にあり、その社会的責任を果たすために事務処理能力の強化が緊急の課題です。そのため財政的基盤の整備や事務局の強化を図らなければならず、そのための方策を確立することは理事会の基本的任務の一つと考えます。

また、来年は国際気象学大気物理学協会会議（IAMAP）が横浜で開催されますが、学会として国際的責務を果たすためにその成功に全力を傾ける必要があります。

竹内清秀 大13年12月5日，昭22年東大卒

気象学の分野にも、気象プロパーと応用の両面があり、協力しあってこそ健全な発展が期待されます。私は特に応用気象の部門の発展に貢献したいものと考えています。また来年、横浜で開かれる IAMAP '93 は、わが学会というより、国際的にも重要な行事であって、是非とも成功させなければなりません。私は財務関係で努力したいと考えています。

大西晴夫 昭21年12月28日，昭45年京大卒

大気科学は基本的には応用科学であり、その最新の知見は何らかの形で社会に還元されることが望ましいことです。一方、気象庁は、科学技術に立脚した防災官庁であり、常に最新の科学的自然認識に基づいた気象業務の維持、発展を図り、国民に対して行政サービスを提供する立場にあります。したがって、大気科学と気象業務は車の両輪をなす関係にあるといつてよいでしょう。

様々な原因があるにせよ、近年、気象庁の現場での調査や研究活動のポテンシャルが以前に比べて低下していることは残念な限りです。これから伸びようとする人たちに対して少しでも良い環境を提供するために、これまでの私の経験を生かしたいと思い

ます。

木田 秀次 昭17年7月17日, 昭49年東大院卒

前期には総合計画や講演企画などを通じて学会運営に参加しました。会員の皆様のご理解とご協力を得て無事任務が果たせましたことに、感謝申し上げます。この度、学会運営に再度協力するよう推薦があり、非力ながらもお受け致しました。

これまでの経験で、学会活動のかなりの部分が会員のボランティア精神で支えられていることを知りましたが、それがまた少数の会員に偏る一面もあります。学会の多様な性格をそれぞれに発展させるためにも、より広範囲の会員が気軽に学会の企画や運営に参加できる仕組みが必要かと思えます。中でも、研究や情報の色々な形での交流の場作りは学会運営の重要な任務の一つであると考えます。学会活動の一層の飛躍のために協力してゆきたいと思えます。

岩崎 俊樹 昭27年8月12日, 昭55和東北大院卒

このたび、諸先輩のご推薦をうけ気象学会の理事に立候補致しました。

私は10年ほど数値予報モデルの開発に携わってきました。現在の数値予報は気象力学のみならず様々の物理過程や観測システムに関するより一層の知識を必要としています。自分の殻に閉じ込めることなく異分野と積極的に交流しそれぞれの成果を業務に活かすことはモデル開発担当者の責務です。同時に予報モデルを構築する立場からそれぞれの分野に対し問題提起をする事も重要であると考えています。

現在の気象学は発展する学問の常として専門分化が進んでいます。しかし、気象学の目的はシステムとしての自然を理解することであり、常に総合化の視点を探していく必要があります。以上念頭におきながらこれからの理事会の役割について考えていきたいと思えます。

中村 一 昭24年7月24日, 昭52年東大院卒

今まで3期に渡り庶務と会計理事を担当し学会の事務局体制の強化に努めてきました。幸い、会員の皆様のご理解のもと、本年度より事務局は1名増の3名の常勤職員体制となる予定であり、また、会員データベースも日常業務に有効利用されるようになり、事務局体制の強化という目標はかなり達成出来ました。

現在、地球環境問題等で気象学に関連した学問・研究に対する社会的な期待と要請が大変強くなって

います。また、気象庁では、気象審議会から「天気予報の自由化」の答申が出され、今後、気象情報が一般社会に広く普及し利用されるようになります。

このような中、気象学会は、学問・研究の推進と一般社会への気象学の普及に今まで以上に努めるべきと考えます。次期の理事会では、この点について微力ながらお役に立てばと願っています。

浅井 富雄 昭7年9月15日, 昭30年京大卒

会員各自の自由な発想に基づく自主的な調査・研究活動を相互の切磋琢磨によって発展させ得るようになり、バックアップすることが学会としての最も大切な任務であろう。学会としてやれることに多くの制約や限界はあるが、会員が研究活動を進めるうえで一つの信頼できる拠り所となるような学会でなければならぬと常日頃考えている。

また、世界の学会に積極的に貢献し、研究の国際協力にも努力すべきであり、そのことがひいては本学会の発展にもつながるであろう。来年7月、横浜で開催する国際気象学大気物理学協会総会 (IAMAP-93) を実り多きものとするため、会員の協力を得て準備にあたりたい。

村上 勝人 昭21年9月5日, 昭49年東大院卒

前期においては気象集誌と通信メディアを担当し、また IAMAP '93 の事務局担当として、学会をめぐる国内・国外の交流について勉強させていただきました。通信メディアの企画はパソコン通信 MSJ・BBS として具体化し、100名を越える方々が参加するコミュニケーションの場となりました。学会全体の規模からみるとまだ小さな苗木ですが、次期においても是非育てていきたいと思っています。気象集誌も会員の皆様のご支援で新方式が定着してきましたが、英語論文誌としては厳しい国際競争に直面しつつあります。ただ座して論文投稿を待つだけでなく、積極的な企画が必要かと考えています。来年の IAMAP '93 に向かっては、学会に係わる様々な研究機関や民間・公共の団体が互いに協力して一つの企画を実現する機会となることに、大きな意義を感じています。これが学会の今後にとって有意義なものとなるよう、微力ながらお手伝いさせていただきます。

藤谷 徳之助 昭20年10月4日, 昭44年京大卒

私は、第26期の常任理事として「天気」の編集を担当し、ささやかですが学会運営のお手伝いをさせ

て頂きました。この期間、学会員の皆様のご協力と、編集委員の方々の積極的な活動に支えられて、大過なく機関誌を発行できましたことを深く感謝しております。新たに開始致しました「1990年代の気象学への手引き」や「カラーページ」などの新企画も概ね好評で、“会員に役立つ学会誌”という編集の基本方針を少しは実践出来たのではないかと考えております。

編集方針の連続性を保つために引き続き担当して協力するように、という尊敬する先生方のご推薦をうけ、立候補することに致しました。

次期にはかねてより懸案の印刷の電子計算機化の実施と、前回から約10年が経過した総目録の発行を計画しており、現在鋭意準備を行っております。今後も会員の皆様の要望に耳を傾けて機関誌づくりを行っていきたくと思っております。よろしくお願ひ致します。

**新田 勅** 昭18年10月12日，昭41年東大卒

最近の地球環境問題などに見られるように、気象に関連した問題は、基礎から応用、研究から行政に及ぶ広範な分野に深くかかわっています。私自身、これまで大学と気象庁の双方の仕事を経験し、多角的な視野を持つことの重要性を痛感しました。

今後、学会活動を通じて、気象に関係した様々な分野や組織の間の連携が、より効果的に、また、円滑に行われるよう努力していきたくと思ひます。

**松野 太郎** 昭9年10月17日，昭32年東大卒

気象学は物理学や化学や電気工学などが産業技術を通じて社会に組み込まれているのとは違って、社会との最大の接点は天気予報であり、社会へのインパクトも社会からの影響もそれほど大きなものではありませんでした。しかし、最近の地球環境問題の重要性の認識は、気象学を今までの状態にしておいてはくれません。経済的に豊かではないが好きにやれる学問という従来の性格は（全部ではないにせよ）変わらざるを得ないと思ひます。新たな社会的責任に応えるには学会（研究者集団）のサイズは世界全体でも小さく、特に日本では、その国力から期待される役割に比べて小さ過ぎます。これらの変化を世代交代よりもはるかに短い時間スケールで乗り切ってゆく方策を考えてゆきたくと思ひます。

**中井 公太** 昭25年5月19日，昭51年気象大卒

尊敬する諸先輩の推薦により非才を省みず立候補

しました。

気象業務の発展と気象学をはじめとする大気科学研究の進歩とは密接不可分の関係であると考えられます。すなわち、気象庁の行う気象観測データは天気予報や注警報等の気象業務推進の土台であると同時に大気科学研究の基礎となるものです。また、こうして得られた研究の成果は新しい気象技術として気象業務のなかに活かされています。

この両者のフィードバック機構を今後とも維持・充実させていくためには、学会は国内外の最新の大気科学研究の動向を踏まえた上で、そのバックアップができるような気象業務のあり方を提言する必要があると考えます。この観点から、学会と気象庁との連絡役の一端として働けたら幸いです。

**高野 清治** 昭31年10月11日，昭51年九大院卒

このたび、諸先輩のご推薦をいただき理事に立候補しました。地球環境の理解、変動の予測のために、社会からもより一層の気象学の発展が望まれており、また、それに対し気象学会の果たすべき役割も大きいと考えられます。これに対し微力ながらお役に立てればと思ひます。

「中部地区」（定数2名）

**里見 穂** 昭13年8月10日，昭37年北大卒

最近の地球規模の環境問題等に見られるように、気象学の研究成果の重要性が改めて認識されてきています。しかし、我々気象業務に携わる者は日々の業務に流され、ややもすると気象業務の根幹が気象学である事を忘れてしまうことがあるのではないかとと思ひます。そこで気象業務の現場と気象学の接点として、気象学会の発展のため微力ながらお役にたてれば幸いであり、それがひいては気象業務の発展に繋がるものと考えています。

**武田 喬男** 昭11年10月31日，昭41年東大卒

地球環境問題に象徴されるように、地球の自然環境の維持・変動の機構に人々の関心が強まり、このような問題に対する気象学の重要性は増しています。しかし、地球の自然環境を理解し、それを保全するためには、気象のみでなく、海洋、陸水、雪氷、地理、土壌、植生その他様々な分野の学問をもとにした総合的な理解が必要となります。また、人工衛星を中心とする地球観測システムの発展により、気象観測技術も非常に幅広いものになっています。このような流れの中で、気象学および応用気象

学は大きな曲がり角に来ていますし、それに就いて、日本気象学会の活動も他の分野との接点も含めて、単に従来の気象学の学会活動を越えた活動がだんだんと必要になるように考えられます。日本気象学会の活動の仕方を急に変えることはできませんし、それは決してよくありませんが、新しい流れにも対応して学会が活動できるように、少しでも貢献したいと考えております。

「関西地区」(定数4名)

**光田 寧** 昭8年10月13日, 昭33年京大院卒  
推薦を受けた以上, 気象学会の発展のため努力いたします。

**廣田 勇** 昭12年5月7日, 昭41年東大院卒  
大学で気象学・大気物理学の教育にたずさわるとして、時流に偏しない基礎教育を充実させ、その中から国際的な視野を持った若い研究者を育ててゆきたい。

**高谷 悟** 昭8年6月29日, 昭31年岡山大卒  
気象学は集中豪雨, 台風等の気象の監視, 予測, これらによる災害の防止等の礎であり, その近年の発展には目覚ましいものがあります。また, 地球温暖化問題等の地球環境問題に見られますように気象学は, ますます, 国際化, 学際化してきています。このようななか, 学問の成果を社会の諸活動に役立てること, 他の関連学会等との交流, 協力を押し進めていくことが気象学会の発展に不可欠であると考えております。これらの面で微力ではありますが努力したいと思っております。

**佐橋 謙** 昭5年8月25日, 昭34年京大院卒  
地方在住のいわゆる研究環境に恵まれていない学会員の研究を活性化し, 地道な研究を維持していくための方策を探りたい。昨年度から関西支部では, 例会の開催地を固定せず, 会員の希望するところで開催できるような道が開けたのも, 私の提言が一つのきっかけになったに違いないと思っている。

また, 一般の人々に対する気象学への関心を高め, 気象学の裾野を広げることに努力したい。

「九州地区」(定数3名)

**高橋 劭** 昭10年3月21日, 昭37年北大院卒  
日本降水物理の強い伝統を持っていますが, 最近の米国での航空機を含む観測技術の進歩はすばらしく, 17年間の米国での研究経験を日本の気象学会発展に尽くしたいと思っております。

**小林 哲夫** 昭20年4月13日, 昭43年京大卒

気象学と境を接する学問分野は多数ありますが, 会員数はともかく, 大会等に参加する関連分野の研究者の数は多いとは言えません。

気象利用研究会という応用気象関係の研究者・技術者の組織の運営にかかわっていますので, 天気予報や大気汚染関係だけでなく, その他の応用気象学に対する関心をも高めていただき, より開かれた学会となるよう微力を尽くしたいと思います。

**山中 陸 男** 昭9年11月21日, 昭34年九大卒

大気科学の進展は著しく, また, いろいろな分野に関連してきています。さらに, 地球温暖化やオゾン層破壊等の問題にも社会の関心が高まっているところで, 気象学会の一員として, また, 気象庁に勤める一員として, これら気象学会関連の種々の研究結果を大いに活用して, 私が直接関係している気象業務の発展のため生かしていくことが必要と考えます。この面で微力を尽くしたいと思います。

「沖縄地区」(定数1名)

**石島 英** 昭10年11月8日, 昭35年東北大院卒

沖縄地方の地理的条件や地域的事情を生かした研究活動を促進するために, 中央の大会や国際的な研究集会, シンポジウム等を従来の開催地にこだわらず, 特色のある地方支部に誘致すること等を通して, 各地方支部の研究活動を促進していきたい。

2. 監事(定数2名)

**佐藤 信夫** 昭24年5月17日, 昭49年東大院卒

諸先輩方の推薦を受け, 監事に立候補いたしました。気象学会の活動は, 近年とみに盛んになっておりますが, この活動を支えるための財政・人・組織の運営に新たな対応が求められております。前期の理事の経験をふまえ, 会員の皆様のご意見を伺いながら, 気象学会の発展のために尽くす所存です。

**多田 一正** 昭24年2月13日, 昭47年京大卒

この度, 前期に引き続き第27期の監事に立候補いたしました。

学会の活動は研究や知識の普及等においてもますます盛んになっており, またそれに伴う組織の整備も順調に進んでいると考えられます。今後この方向が持続するように努めたい。

微力ではありますが, 会員として学会の活動に参与し, また学会運営が適切に行われるよう監事としての役割を尽くしたい。